

年間第十一主日

2018.6.17

マルコ 4・26-34

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日、年間第十一主日の福音は、ガリラヤの湖のほとりに集って来た人々に語りかけられたイエスのたとえ話の一節です。ガリラヤ湖の湖畔に集まって、イエスの語られるみことばに聴き入った人々のように、わたしたちもこのミサの中で、あらためてイエスのみことばに耳を傾けたいと思います。

ここに集うわたしたちは、ガリラヤの湖の岸辺でイエスの語られるみことばに耳を傾けた人々とは違って、はじめてイエスのこのたとえ話を聴いたわけではありません。むしろ、今日の福音のたとえ話は、わたしたちにとってもう何度も聴いたことのある、わたしたちに馴染み深いたとえばなしです。けれども、今日もわたしたちが聴いた福音のみことばは、それがたとえ話であることによつていつも新しいのです。何故なら、このたとえ話を聴く時、イエスはこのたとえ話によつて何をわたしたちに語ろうとしておられるのだろうかという疑問をわたしたちの中に新たに生じさせるからです。今日も、そのような疑問を新たにして、イエスが語りかけておられるたとえ話に新たな心で耳を傾けたいと思います。

イエスが語られるたとえ話の内容そのものは、土に蒔かれた種が成長して行って豊かな実りを結ぶありさまにしろ、小さなからし種が驚くほど大きく育つありさまにしろ、都会生活を送るわたしたちはそれを実際に目にする機会がないということを除けば、それほど理解することが難しいものではありません。イエスはこのたとえ話で、今のわたしたちにとつても、その気になれば誰でも実際に目にする事が出来る事柄を語っておられるのです。けれども、イエスは誰でも目にする事が出来る事柄を語っておられるだけなのではありません。イエスの後につき従って、ガリラヤの湖の岸辺に集って来た人々にイエスが語り聴かせてくださったのは、神の国のたとえ話です。イエスは、人々が実際に目にする事が出来ることをたとえにして、神の国のありさまを語り聴かせてくださっているのです。

しかし、これらのたとえ話でイエスは神の国を語っておられるのだと理解出来たとしても、それだけでは、イエスがこれらのたとえ話によつて語ろうとしておられることを理解したことにはなりません。現代社会に生きるわたしたちは、ガリラヤ湖の岸辺に座って、イエスが語られることに喜んで聴き入っていた人々のようにはゆったりとした気持ちを持てずに、はっきりとした結論を求

めがちです。神の国ということでイエスが語ろうとしておられることの実体を、つまり神の国とは何かということ、あまりにも性急に知りたいと思ってしまう。けれども、それでは、わざわざたとえ話をもって神の国について語られたイエスの意図が台無しになってしまうことになるかもしれません。

神の国についてのこのようなたとえ話を語られたイエスの目には、神の国はこのような姿で見えているのです。このたとえ話で語られていることこそが、イエスの見ておられる神の国のありさまなのです。今日もこのミサの中で、この神の国のたとえ話を聴かせてくださるイエスは、ここに集うわたしたちにもイエスが見ておられる神の国が成長してゆく喜びを味わわせようとして、語りかけておられるのです。

最初にも言いましたが、わたしたちは、イエスがこれらのたとえ話を語られたときガリラヤの湖畔でそれを聴いた人々のように初めてイエスのこのことばを聴いているわけではありません。しかし、わたしたちがもう何度も聴いてよく知っていることをあらためて聴いている、ということに過ぎないのではありません。

過ぎ越しの聖なる三日間、主の復活、主の昇天、そして聖霊降臨を祝っていた者たちとして、今日、年間第十一主日のミサの中でわたしたちはあらためて、ガリラヤの湖畔に集って来た人々に語りかけられたイエスのみことばを聴いているのです。そのようなわたしたちは、同じマルコ福音書に語られているイエスの復活の場面を思い起こす必要があるかもしれません。

「あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを探しているが、あの方は復活されてここにはおられない。・・・あの方はあなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われていたとおりそこでお目にかかれる」。復活の朝、イエスの墓に行った婦人たちが空になった墓の中で聴いた天使の告知のことばです。主の復活を祝ったわたしたちは、この天使の告知に従ってガリラヤ湖畔の今日の福音の場面に戻って、あらためて今日の福音を、復活されてわたしたちとともにいてくださる主のみことばとして聴いたのです。

今日もこのミサの中でイエスの十字架の死と復活の記念を行うわたしたちは、イエスがどのようにわたしたちの中に神の国の種を蒔いてくださったか知っているはず。十字架の上に流されたその血によって、イエスはわたしたちの中に神の国の種を蒔いてくださったのです。イエスが十字架の死によって蒔かれた神の国のいのちの種は、イエスの復活によって、青々と育った苗となって弟子たちの中に植えつけられたのです。イエスを十字架の上に見捨てた弟子たちのもとに戻ってきてくださった、復活されたイエスは、その愛とゆるしの鍬をもって弟子たちの心を掘り起こし、神の国のいのちの苗を植えつけてくださったのです。最初の弟子たちの教会の中に豊かに実った神の国のいのちの種は、

幾多の苦難を経て、はるばると聖霊の風に運ばれて、わたしたちの心の畑にもこぼれ落ちて芽を出したのです。風が吹けば飛んでしまうようなからし種に宿った神の国のいのちの種は、今こうしてイエスの十字架の祭壇を囲んで感謝のミサをささげているわたしたちの中にも豊かな実りを結んでいるのです。

今日の福音を通して語られるイエスのたとえ話をこのように受け止めることは、あまりにも空想的と思われるかもしれませんが、けれども、イエスはわたしたちにこのような空想の余地を与えるために、あえて、それぞれの人の聴く力に応じて、これらのたとえ話を語っておられるのです。いずれにしても、イエスはこれらのたとえ話をもって神の国を語っておられるのです。そして、イエスが語られる神の国は、イエスがこのわたしたちの世界とその中に生きるわたしたち一人ひとりの心のうちにもたらされた神の国です。

畑に蒔いた種の成長して行く様子を期待に満ちた喜びをもって見守る農夫のように、イエスは、わたしたちの中に蒔いてくださった神の国のいのちの種の成長を確信して待っていて下さるのです。そのようなイエスの期待に応えるために、信仰によってわたしたちが受け入れた、神の国の小さな種がわたしたちの中に成長してゆくことを、いのちある全てのものに実りをもたらして下さる全能の父なる神、十字架の上に死んだイエスを復活させてくださった全能の父なる神に、わたしたちのいのちの主イエス・キリストの御名によって祈り求めたいと思います。